

名古屋大学医学部医学科 5 年 井上結貴

この度私は 2024 年 7 月 7 日から 13 日までの一週間、サマープログラムに参加しました。名古屋大学主催で初めて開催された取り組みです。想像以上に充実した内容に驚き、刺激を受けた経験を報告いたします。

参加した理由は以下三つです。第一に、これまで COVID-19 の制限で協定校との留学プログラムの多くが停止しており、zoom での交流の機会しかなかったため、対面でしかも交通費のかからない名古屋開催に魅力を感じたこと、第二に各国の医療制度の特色や働き方について考えるとともに、志を同じくする学生と接点を持つことで、出会った方々と将来国際的な仕事がしたいこと、第三に、病院実習の経験を通してプログラムの要旨である” Bridging community medicine and innovation in Japan” に共感、貢献できると考えたためです。

初日のアイスブレイクをはじめ、1 週間を通して日中米でグループになりプレゼンをする機会を多くいただきました。米国学生のプレゼン準備での判断の速さ、話のうまさや堂々とした態度は目を見張るものがありました。刺激を受け、日本人チームも火が付きしました。

月曜日のラボツアーでは中国の学生と整形外科小児棟を回り、異なる視点で質問をする学生の姿に刺激をもらいました。講演会では、手の外科による telemedicine の講義が印象的でした。医師の目視での判断で多くの情報が得られるという特色を生かし、救急隊と協力して適切なトリアージを行っている取り組みは珍しいものだそうです。

水曜日は、岐阜県に拠点をもつ、かがやきクリニックでの診療見学に参加しました。運営者の方のご厚意で一泊させていただきました。各国学生は、鵜飼の屋形船やスーパー銭湯も非常に楽しんでいました。中国からの学生は食事・生活面で類似点が多かったのに対し、米国学生は仕組みや価値観の違いに驚いていました。

かがやきクリニックは、地域に根差した在宅医療・障害のある小児のためのリハビリや療育ケアを専門としています。名古屋大学を卒業された元血液内科医の先生が岐阜と名古屋に拠点を据えて運営されています。施設は温かみのある吹き抜けの木造で、バーカウンターやグランドピアノ、カンファレンスルームなどもあり快適でした。重度心身障害者の子どもたちのための工夫も随所に凝らされていました。例えば、ほとんどすべての時間を車いすに乗って過ごすので、天井に変化をつけたり、眩しくないよう間接照明になっていたりします。プールでは浮力を体験することで、筋肉量の弱い子どもたちも初めて自力で自由に動き回ることができ、北海道や九州からリハビリに来る親子もたくさんいらっしやるそうです。全国その他施設にヒアリングした課題を活かした点も多く、SMA のような疾患をもつ子どもたちは筋肉量が少なく寒がりであるため、大きすぎないプールで特別なボイラーを使ってお風呂ほどの温度にしているそうです。さらに、絵本だけでなく、普段子どもたちを介護するご家族のためのフィットネスマシンも豊富にありました。構想に数年かけ、様々な立場の方とディスカッションすることで今の施設の形ができたそうです。チー

ムで医師以外の職種、考え方をを持った人と柔軟に働くことで、より良いものを作り上げる素敵さを肌で感じることができました。また、将来は最先端の医療を提供したいと思ってきましたが、この機会を通して、患者さんや家族が肩の力をぬいて滞在できるような環境を整えることが QOL に大きく貢献すると知ることができました。

在宅医療の見学では、翻訳する機会を頂きました。患者さんが海外からの学生に勉強を頑張ってもらってねとやさしく励ましてくださっていました。先生のお話で大きな学びとなったことは、薬剤整理の際のカルテの病院ごとの分断の問題点でした。例えば「前医から PPI が処方されているとき、ただの胸やけか、GERD があったのか、アスピリンやステロイドと併せて処方されたのか分からず、勝手にやめてよいものか判断が非常に難しくなる」とおっしゃっていました。不必要な投薬による健康上の問題で生じる医療費増大、ポリファーマシーにも関わる問題のため、時代遅れなカルテのシステムについては、ぜひ対策を講じる必要があると感じました。

その後、食事会の席でノースカロライナ大学チャペルヒル校老年内科の Larson 先生から、「アメリカでは患者がオンラインですべてのカルテ、検査結果を見ることができるため、スムーズで患者にとって透明性が高い反面、がんの告知などの結果では半狂乱になって救急に飛び込んでくる人、生理的範囲の外れ値をみて不安になり、Google で検索してしまう人など、社会問題もある」とお話ししてくださいました。

金曜日の CCD (Clinical Case Discussion) では、名大生が堂々と進行している姿に心強い思いでした。CCD とは、NJM の興味深い症例を学生がプレゼンし、学生が参加する双方向型の臨床推論の授業で、Itzel 先生を中心に数年前から行っています。ドイツのトップ医学部である LMU 大学の臨床推論教育を取り入れたものです。私は以前この症例を別の JOCCD というプログラムで英・香港・豪・伊・独の学生と考えたため、答えは知っていたのですが、答えにつながる消化器内科・外科をまだ習っていない状態の学生が多い中で、うまく切り札にたどり着ける人・迷路に入り込んでしまう人がどんな調べ方をしているか見ることは非常に勉強になりました。また、米国からいらっしゃった Duke 大学の Gordon 先生、ノースカロライナ大学チャペルヒル校の Larson 先生のディスカッションの先導が素晴らしく刺激を頂きました。学生の疑問に答えるとともに実臨床での様子やさらなる問いを投げかけ、うまく紹介して下さっていました。それぞれの先生方の講義を受ける機会もありましたが、学生に課題やクイズを与えることで双方向の仕組みをとっており、学生がより能動的に参加することで、日本型の授業よりも全体の満足度が高かったように思います。将来米国で学びたいという気持ちが強くなりました。

授業外でも、京都に旅行に行ったり、授業後にみんなで食事に行ったりしました。英語の活用能力だけが重要ではないとわかり、積極性や好奇心、相手を尊重する態度を備えた国際的な医師になりたいとより強く思うようになりました。その一方で、日中のやり取りではどちらにとっても母語でない英語を使わなければならない、ストレスを感じる場面もありました。フランクに会話する中で、北京大学の特色を知りました。血液内科がとても強

く、また、放射線科ならぬ「内視鏡検査科」もあり、専門的な検査や結果の解釈が行われているそうです。また、中国は共産党政権かである影響か、医師の社会的地位や給料が日米ほど高くなく、都市と農村で医療レベルの格差も莫大であるそうです。近くて遠い国、中国について、生の声を聴くことができて大変楽しかったです。

まとめると、第一に、見慣れた物事も、各国の学生と一緒に経験することで、今の自分にはない見方に触れることができました。

第二に、名古屋は国際的な名声があるとはいえず、東京、京都、大阪と比べると名古屋ってどこ？という風潮がありますが、今後このプログラムが続くことで、各国の未来ある医学生に、名古屋の医療や文化について知っていただければと思います。試験期間の前後で応募者が少なく、名大生は選考なしで参加させていただいたのですが、アメリカなど一部の大学では学内選考があったそうです。名古屋まではるばる参加したいと思ってくれたことを、非常にうれしく光栄に感じました。

第三に、将来の研究や臨床での国際的な協力に非常に役立つと感じました。また、医学教育や医療システムの様々な在り方について知ること、医療行政にも興味を持つようになりました。朝早くから夜まで活動や課題が盛りだくさんだったため、疲れはありましたが、レクチャーだけでなく、宿泊や食事の機会もご準備いただき、性別・国籍問わず皆さんと気の置けない関係になれたと感じております。

非常に実り多い一週間を送らせていただき、関係者の皆様には、この場をお借りして深くお礼申し上げます。



